＜バーデンフォルクスホッホシューレ（オーストリア）＞
（Ｖｏｌｋｓ　Ｈｏｃｈ　Ｓｃｈｕｌｅ　Ｂａｄｅｎ）

＝バーデン市の概要と成人教育＝

バーデン市はウィーンの南２６㎞、ウィーン国際空港からは３３㎞。
ウィーンの森の東で、ヘレナ渓谷の入り口に位置し、森やブドウ畑に囲まれている。
古代ローマ時代より、すぐれた効能の硫黄温泉とともに、保養地として発展した街である。

人口は約２３５００人。面積は２７ha。主産業は、商工業、ブドウ栽培、観光等。

オーストリアの成人教育運動は、１８９７年オーストリア・ハンガリー帝国時代に始まった。

国民大学校は労働運動と両輪をなし、２３区画の行政区に１つ必ずある。

これは市町村区分とは違い、近郊も含まれる。施設のない場合は学校の教室も利用する。

＝バーデンＶＨＳ（国民大学校）＝

お話をしてくださったのは、校長であるＭｓ．Ｄｉｅｔｂｕｒｇａ　Ｈｕｂｅｒさん。

大の日本びいきで、この国民大学校で、日本文化の教室をいくつも取り入れていることを誇りにしていると、言ってくださった。

利益を追わない，公益団体として運営されている。
ゲッセルシャフトフレンデバーデン（バーデン友人協会）という，言ってみればバーデンを盛り上げる会のようなものがあり、協会長は市長。
１５人の管理運営委員会があり、協会員は100人ほどいて、１年に100シリング（約1100円）を払う。

この協会で年２回総会をし、１０月に国民大学校の予算をたて、３月に会計検査。
一切の責任をもつ。

財源はこの会費と、州からの補助が年10万～12万シリング（110～130万円）と受講料で、講師謝礼や宣伝費、備品購入費に使われている。
バーデン市は維持管理費を年に１１００万円位負担している。

＝運営方法＝

１年を２期制にして、半年分ずつプログラムを出している。
講座の企画は、校長と講師とで相談しながら決めている。講師からの提案もあれば、校長の判断で開催する講座もある。

講師は登録制で、現在１１３人。

１時限（１時間半）２７０シリング（約３０００円）
ボランティア精神がなければできないので、ほとんどの講師が別に職業を持っている。

そうしたことから、火曜日の夜に教室を開きたいという講師の希望が多いのだが、施設のキャパシティは飽和状態で、１つの部屋を午前２講座、午後夜間、各１講座と５回使用

している。学校の教室や体育館、博物館が会場になることもある。
　９５年度後期は、５１６コースで、５５１６人が参加している。５年前には
３４２コースで３７１８人の参加であったことと比べても、市民の学習への関心の高さが伺われる。

講座の内容		参加者	
語学関係	３９％	女性	７６％
健康に関すること	２０％	男性	２４％
コンピューター関連	１６％	３０～４０歳	２２％
創作・芸術	１０％	４０～５０歳	１８％
日本に関するもの	１５％	事務職	４６％
（日本語　生け花 座禅　和食 茶道　柔道）		主婦	１８％
		年金受給者	１５％
		その他	２１％

　語学関係の講座がいちばん多いが、これについては英語教師のＭｓ．シュローラにお話ししていただいた。
　語学に関しては、ヨーロッパで公的に認められている資格、Ｉｎｔｅｒｎａｔｉｏｎａｌ　Ｃｅｒｔｉｆｉｃａｔｉｏｎ　Ｃｏｎｆｅｒｒｅｎｃｅをこの学校では取得することができる。
ウィーンのＶＨＳで、この資格が取れるのはこの学校だけで、進んでいる方だそうだ。
この資格を取ると労働許可書をとるときに、有利になるとのこと。
　また、東欧圏の崩壊で、外国人労働者が多く流入し、その人たちに語学教育の機会を与えることが必要とされている。
　こうしたことから、語学のコースが一番多くの割合をしめることになった。
　受講料の設定をみてみると、趣味の色が濃いものの方が値段が高く、語学コースの方が安い。日本では講師謝礼は語学の講座が高く、生活技術関連はその３分の１位なのだから、大きな違いである。
　さて、小さい子を持つ母親の学習への手だてだが、保育の施設はなく、幼稚園のある時間帯に開催する講座に参加してもらっている。

障害者に対しては、建物が文化財として保護されているので増改築できず、車椅子で利用することができないので、うつ手立てがないとのこと。小中学校を借りようとすると高い賃貸料を要求してくるので、それもできない。とても残念に思っているそうだ。

しかし、障害者に対しては独自の学校があることと、この学校では年に２回スイミングのコースを開いていて、この受講料は、障害者生活救済の組織が本人に代わって、支払うようになっている。

＝ＶＨＳで学ぶこと＝

このような国民大学校（ＶｏｌｋｓＨｏｃｈＳｃｈｕｌｅ）で学ぶことは、ひとつには教養をつけるという意味があるが、社会的な面からは、ここで学ぶことで地域の人が知り合いコミュニケーションがとれ、仲間づくりができていることが大きな意味であると、校長のフーバーさんは話された。

愛着を感じて４、５年、あるいは１０年も同じ講座に通っている人もあるそうだ。受講者が目減りしてきたので、統合しようとすると反対にあうこともあるという。

でも、講座の申し込みはあくまでも先着順だそう。再び職業につこうという主婦や、自分の仕事に役立てようとする若い人も多い。

８人参加すればペイできるように受講料を設定しているが、参加者の少ないコースは、市が宣伝してくれる。また、新聞を活用しているが、広告費がかからないように、校長先生はせっせと投稿しているそうだ。

「殺人事件や事故の記事ばかり載るよりも、学習していかに楽しく、成功したかが新聞に載ったほうが、世の中のためでしょう？」と笑っていらした。

当日、バーデンの地方新聞の記者が、日本からの視察だと、私たちを取材していった。写真入りで掲載されるとのことなので、バーデン国民大学校の宣伝に一役かったかもしれない。

通訳はＭｒ．Ｔｏｓｉｙｕｋｉ　Ｍｉｔｓｕｇｉ